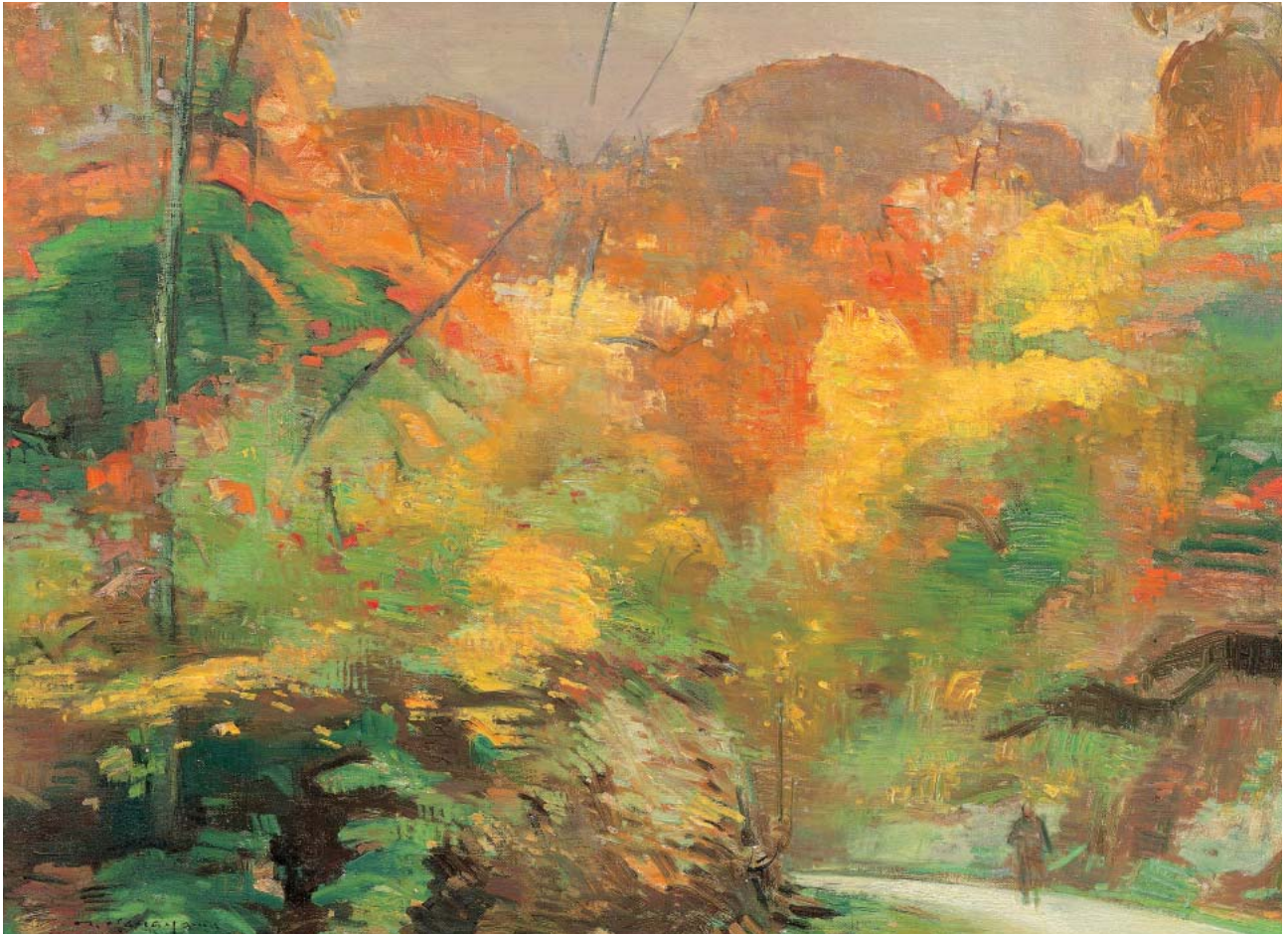


Kawasaki 美術館
金山平三の世界



《秋たけなわ》 1945-56 (昭和20-31)年 45.3×60.5cm 油彩・布 兵庫県立美術館蔵

色づいた秋の山の躍動感と、
人物が示す人と自然との交流

一九六六(昭和四十二年)、金山の逝去後川崎重工業株式会社に保管されていた作品二三〇点が、妻のらく夫人より兵庫県に寄贈され、それを記念して同年五月二十一日から六月三日まで兵庫県立神戸生活科学センターにて、「金山平三画伯遺作展」が開催された。

この作品は、その展覧会に出品されたうちの一点で、同展では十和田で描かれたものと分類されている。金山独自の短い筆致と豊かな色彩で表現された、山あいの道のまわりの秋に色づいた木々の葉叢はむらは、それ自身が生命に満ちており、目に心地よい躍動感を示している。

興味深いのは、画面右下に小さく描かれた人物像である。金山の作品には時折見受けられるモチーフだが、その多くが後ろ向きで描かれているのとは対照的に、ここでは珍しくこちら側を向いている。画家に向かつて歩み寄るようなこの人物によって、描かれた風景はその広大さを明らかにし、そこに描かれた自然は、人との営みの中で季節ごとに表情を変化させていく。画家が表現したかったのは、人と自然とのこうした交流なのだろうと思わせる一点である。

(兵庫県立美術館学芸員
相良周作)

金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。

